

第2部 縄文から弥生へ 諏訪神社が物語るもの

日本の縄文1万年は、平和な繁栄のうちに世界でも珍しく成熟した土器文明を作った。それはある意味で世界から孤立していたからこそ成熟できたとも言える。しかしその孤立はいつまでも存続し続けることはできない運命であった。アジア大陸の文明の急速な発展と民族興亡の波及が、この辺境の地日本列島の縄文の眠りを揺り起こすことになる。弥生時代への移行である。それがどのような形で行われたかについては歴史学は多くを語らない。神話を含めて書かれた歴史は弥生時代の権力争いから生まれたのものである。縄文から弥生への移行は土器の様式などの上ではくっきりとした境目を持つて見ることができる。しかし縄文人と弥生人の接触はどのように行われたのか、縄文人たちは抹殺されたのか、平和裡に移行したのか、どのように生活を変えていったのか、ここで起きたはずの大きな動乱については何も分かっていない。できればその痕跡を縄文遺跡のなかに発見したい。

弥生文化は、大陸から直接にまた半島を経由してから波状的に押し寄せた。彼らは勝ち組であれ、負け組であれ、争いの中で大陸から押し出されて日本列島にやってきたわけだから、戦いの技術と征服支配の文化を担っていたはずである。弥生文化をもつ部族が次々に日本に来たとき、先着であれ、後発であれ、それらの弥生部族間では戦闘を伴う勢力あらしが起きたことは容易に想像がつく。農耕文化は余剰生産物の富の蓄積が生まれるので、戦って奪うというインセンティブも生じた。弥生族間の権力争いは記紀にある天孫族の天下りや国津神の抵抗から出雲の国譲りまでの神話に色濃く伝えられている通りだ。

神話から類推して、縄文から弥生時代への移行も、征服によってなされたかのように推測しがちだが、それは違うのだ。縄文弥生の混在遺跡から教えられる様子は、弥生文化の先頭隊が縄文部族と接したとき、そこに戦闘的緊張はなく、敬意と友好の関係で始まった可能性が高い。その証拠を、今回能登、北陸、並びに諏訪各地を訪問してわかった。そして意外なことに、この探求全体として求めていた答え「日本の神社の原型の創生」を物語っていたのだ。

2-1 出雲族

縄文と弥生のはじめての接触という歴史的役割をはたしたのは出雲族であった。西村真次博士の著書「大和時代」によれば、出雲族は黒竜江あたりのツングース（女真族）で、BC1800～1000年頃、船で日本海を南下して、樺太—小樽—陸奥—出羽さらに出雲に進出したという。そして出雲の地が良質な砂鉄が取れる為、ここに大きな王朝を作ったとある。

この時代のBC2000年ごろは、中国では最初の征服王朝「夏」が生まれた。NHKが2012年冬「中国文明の謎」と題して中井貴一が出演する連続番組で、夏殷周の3つの古代王朝の出自と変遷を発掘現場からレポートしていた。初の征服国家を作った夏の種族は、その後の中国の伝統となった戦いと支配の形を典礼の宮殿として創出した。青銅器からすぐ鉄器の文化になっていた。

出雲族が日本列島に移ったのはこの時代だから、中国大陸のこのような武力の覇権争いの影響を受けていたと思われる。青銅器や鉄器文化と、平地で灌漑をする穀類の栽培農業技術も知っていた。権力集中の文化をもっていた。当時の縄文人は、森に近い乾燥した高台に住み、その土地では合理的といえる竪穴式住居に住んでいたが、一方の出雲族は、木造の高床式の住居文化を持っていた。この高床式は湿気の多い平地でも作ることができ、変化に富む住宅形式であった。一言で言って、日本の縄文人たちとは異質のより高い文明をもっていた。

この出雲族が日本大陸で出会ったのが、武力争いとは無縁の、平和な交流しか知らない縄文人たちであった。この集団が日本列島に入ってきたとき、どのように縄文人たちと接したのだろうか。その舞台はまず、新潟から北陸、そして諏訪でおきた。

2-2 猿田彦

能登半島の中央にある縄文部落、真脇遺跡は前章で紹介したが、その手前に中島町というユニークな町がある。仲代達矢がこの草深い田舎に無名塾という俳優養成所と、壮大な演劇場を建てた。能登演劇堂という。舞台正面の大扉を開くと舞台は自然の山と森が借景となる有名な劇場だ。普段は人を見かけない田舎だが、公演があるとき全国から俳優と観客が押し寄せる。

ここに猿田彦のゆかりの祭りがある。久麻加夫都阿良加志比古神社（くまかぶ



とあらかしひこ) (熊甲神社)だ。この日本一長い名前の由来は祭神の韓国渡来の王子とのことだが、その大祭お熊甲(おくまかぶと)は、高さ20mもの赤いのぼり旗が20本も林立する能登最大の祭りだ。神社に向かうのぼりの祭列を、飛び跳ねながらひょうきんなしぐ

さで先導するのが猿田彦だ。猿田彦の存在はこの祭りを象徴するほどであり、近くにその名前を借りた猿田彦温泉がある。湾を一望できる人気の温泉だが、この温泉のマークである猿田彦の滑稽な姿をみて、神話の架空な存在ではなく歴史的リアリティを感じた。古事記神話にある天孫降臨の先導役を務めた国津神の猿田彦は、実はここで実在したのだ。

神社の祭神が今は名も知らない伝説の半島渡来の貴人であり、その渡来を先導する猿田彦の活躍を見て、私はこんな想像をした。能登や長野に点在した縄文部落に、先進文化の出雲族が近づいてきた。縄文人たちは互いに日本列島を広く交

易していたので、ほかの地方の縄文人が来ても驚かない、しかしついで出会ったことのないような例えばこののぼりでも立てたようなきらびやかな出雲族の出現はショックを巻き起したに違いない。縄文語のコミュニケーションもはじめは困難だった。そこに無駄な摩擦を起こさ



ないための仕掛けを出雲族は用意したのだ。それは賑やかな先触れであった。おそらく縄文人のなかから出た人たちで、先に出雲族に接してその役割を与えられた人であろう。神話でも国津神とされているから、猿田彦は縄文人だ。通訳でもあった。猿田彦は「これから来る出雲族は、危害を加えないし、素晴らしいもの

を、もたらせてくれる人たちだから、歓迎して一番いい場所に案内して滞在してもらいなさい。」と吹き込んだのであろう。猿田彦の話聞いて安心した縄文部落の人々は総出で出雲族の到来を待ち受け歓迎した。

その様子を想像させる出来事が2000年後の明治時代にもあった。明治20年ごろアメリカの冒険家パーシバル・ローウエル（後に火星観測で運河を見たと有名）が、日本の辺境を旅したくて能登を訪れた。彼はその旅行を紀行記「NOTO」としてまとめ、アメリカで出版した。その中で白人の外国人を初めて見た能登の人々を描いている。彼らは前の部落から伝わってくる情報を聞き、大慌てで接待の準備を整え、村長村役が出迎え、一番いい旅館に泊めて歓迎している。その様子をユーモアを交えて描いている。この能登人は間違いなく縄文の末裔であった。それは縄文末期に出雲族を迎えた様子と同じなのである。

2-3 羽咋市（ハクイシ）の気多（ケタ）大社

能登半島の根元に羽咋市という難読の市がある。その町の中心は気多大社である。



市の名前も変わっているが、気多大社という神社の名前も一癖ありそうだ。大己貴命が出雲から舟で能登に入り、国土を開拓した後に守護神として鎮まるとされる。重要文化財の社殿群の背後に広がる原始林は清らかな清水が流れ、今は国の天然記念物の「入らずの森」で知られる。気多神社は、出雲や諏訪と同じく大社を名乗っている。国家神

道の名残の神社本庁から離脱する訴訟を起こすほど独立心の強い神社だ。出雲大社も戦前国家権力と戦って独立の出雲教を設立したことは有名だ。

さて社務所でこの変わった名前の由来について尋ねた。社務所のおばさんは由来記を何種かくれて、確定的な由来は不明ながら、ひとつの説としてアイヌ語のコタから来たとの説がある、姉妹神社にコタ神社というのがあると教えてくれた。

コタというのは「滞在した」という意味だそうだ。コタンは村だ。居多神社（こたじんじゃ）は、新潟県上越市にある神社で、大己貴命（おおなむちのみこと）である。なるほどみな兄弟の出雲系だ。

気多大社は海から近いが小高い森にある。参道は海に面した大鳥居からはじまる。その近くの麓には縄文住居の遺跡が発見されている。縄文集落から見上げる森と清流が縄文人の聖地であり、今も御神体である気多大社になっている。この地に船で出雲族が来たとき、先導役の猿田彦の前触れで部落総出で歓迎したことだろう。自分たちの部落にお留めするのは恐れ多い、一番の場所は彼らの聖地である神聖の森と清流の入り口であった。彼らは、この地を提供し、出雲族はここにヤシロを構えた。縄文人はその後も森と清流の聖地を崇めたが、それは出雲族の族長大己貴命を祀る社となったので、二重の意味を持つようになった。日本中の神社が同じような経過をたどっていったのだ。

気多大社という不思議な名前の神社はそのようなことを物語っている。

2-4 諏訪地方

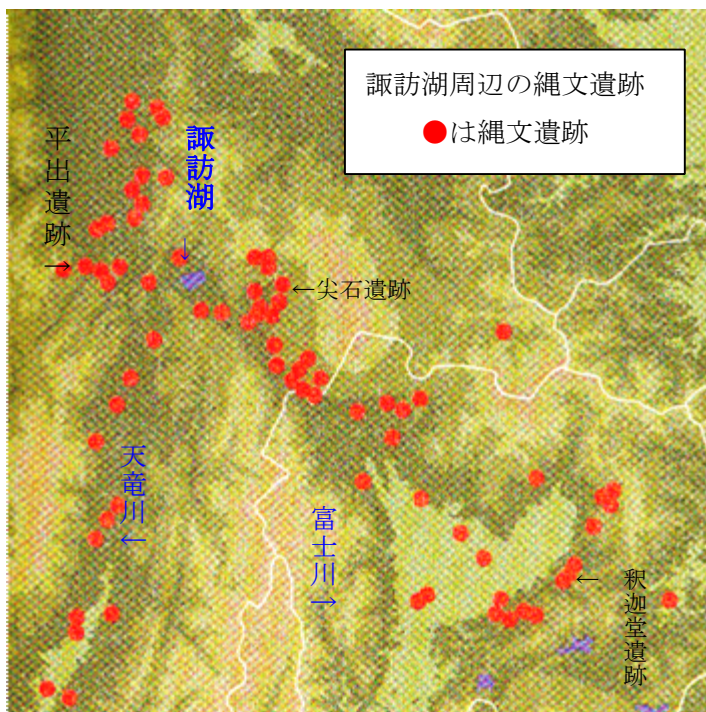
諏訪地方は縄文遺跡がおびただしくある地帯であるが、その中心にあるのが諏訪大社だ。ここは縄文から弥生時代にどう移って行ったのかを推測できる貴重な

証拠のあるところである。

2-4-1 諏訪周辺の縄文遺跡

諏訪湖周辺には縄文遺跡がおおい。そのいくつかを紹介しよう。

長野県松本平の南端にあたり、西に穂高岳や常念岳など北アルプスの峻嶺を、ま



た東に鉢伏山や高ボッチ山など東山山麓のなだらかな山並みを仰ぎ見る平出遺跡は縄文時代の、早期から晩期までのほぼ全期間の痕跡をたどることができる。

最も栄えたのは中期（約4,500年前～5,500年前）で、116軒の住居が見つかっていて、これらの住居からは、豪華な文様で飾られた土器や石器類が多量に出土している。また土偶や立石といった信仰に関係する遺構・遺物も多く、豊かで安定した暮らしが続けられたことがうかがえる。

尖石・与助尾根遺跡（とがりいし・よすけおねいせき）は、長野県茅野市豊平南大塩にある縄文時代中期の集落遺跡で戦前から発掘されてきた縄文時代を代表する遺跡の1つとして知られている。現在は立派な博物館がある。

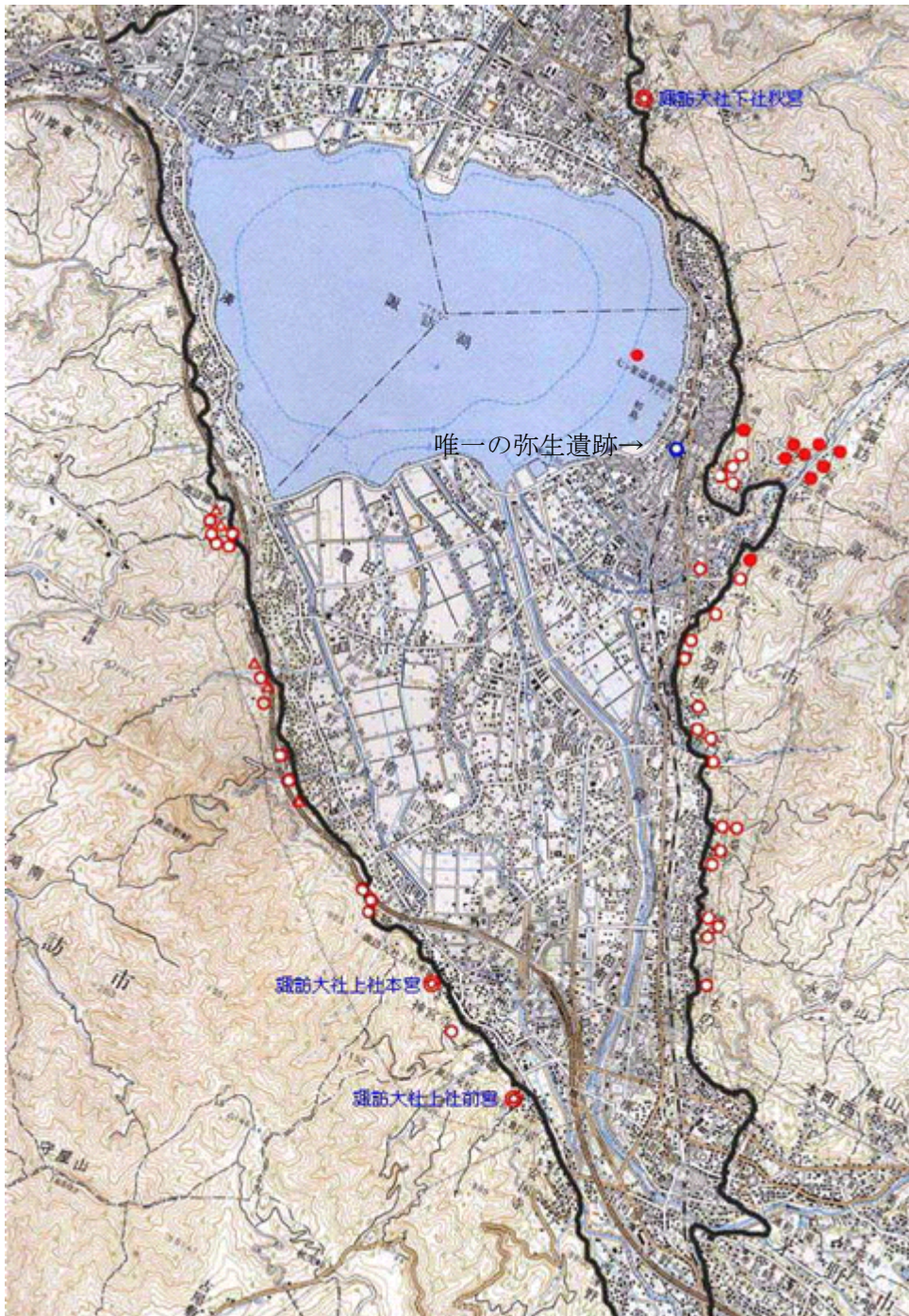
釈迦堂遺跡は中央高速道のPA釈迦堂の南側の高台にあっておおきな博物館が置かれている。PAに車を置いて入場することができる。ここの遺跡群は、甲府盆地東部、京戸川扇状地の扇央地に位置し、南北450メートルにわたって分布する。標高は450メートル前後。1980年（昭和55年）から翌年にかけて中央自動車道の工事にあたり、山梨県教育委員会による発掘調査が行われ、多数の縄文時代（前期・中期・後期）の竪穴式住居跡や1000点以上におよぶ土偶などが出土した。博物館にはおびただしい数の土器土偶が展示されている。ユニークなのは可愛い人面土偶だ。



このように諏訪湖周辺の高台からはじまって、釜無川、笛吹川、天竜川の溪谷沿いに、まるで縄文銀座のように分布している。このあたり縄文時代を通じて、富士山や浅間のような噴火の災害もさけられ、気候も温暖で、鹿などの狩猟、栗などの採取、水が豊かに湧き、川魚も取れ生活しやすかったのだろう。

2-4-2 諏訪湖周辺で何が起きたのか

さてこれほどの縄文銀座であっても、諏訪湖周辺に注目すれば、諏訪湖畔には遺跡は発見されていないのだ。下の図のとおり、縄文遺跡はすべ



て水面から 800m（図の黒線）より上に存在しているという調査結果がある。水位が変化しても土地が浸水しないところでないとは堅穴住居はできないのだ。

この地を代表する 4 つの諏訪大社も見事にその線上にある。これが縄文由来の神社である証拠でもある。現代の湖畔は高級リゾートで開発され尽くしているが、諏訪湖南東の湖畔にぼつんと遺跡がある。これが数少ない弥生遺跡なのだ。弥生遺跡が残りにくいのはそのまま歴史代に人々が住み続けたからだろう。縄文遺跡が比較的に多く見つかるのは、縄文人が住んだ場所が山麓で、その後は住居地としては放棄されたから保存されてしまったと考えられる。

この縄文銀座にも出雲族がやってきた。気多大社の例のごとく、ここでも猿田彦役の先導があつて賑やかに到来したのであろう。その道筋に当たる塩尻の銀嶺カントリーゴルフ場の造設時には多くの遺跡跡が発見されて多くは消えたが、三番ホールティーグラウンドのそばには十五社平という石塚が残っている。ここは建御名方命の妻八坂刀売命が子供を産んだところだという。ここから塩尻峠を越えれば縄文銀座だ。

この周辺の縄文部落は共通の聖地を持っていた。守谷山（モリヤはアイヌ語で小山の土地）だ。いまも諏訪大社本宮の御神体だ。諏訪大社の前宮に参れば、守矢山を見上げる神社の境内は 4 本柱がたつて、その脇にこんこんと清水が湧き出し聖地にふさわしい場所とわかる。右上の写真は、



清流が湧き出しているところを囲んでいる巨木の柱の 1 本である。左の写真は前宮の鳥居で、今の本宮は数百 m 北に移設されて、大きく豪華だが、この前宮は質素だ。元来は守矢山が神体だが、今の御神体は建御名方命の妻八坂刀売命で神殿の裏にあるこんもりとした墓地に葬られているという。

建御名方命は神話によれば、出雲の大国命の子供で国譲りに反対して、諏訪に敗退した神ということになっている。出雲族の直系の大物であったことは間違いない。家族一族の集団を率いてついにこの地に来た。先のゴルフ場あたりに来たとき、縄文人たちのなかで彼らをどのように受け止めるかで多少の緊張感があったはずで、戦って縄文側が敗れたという伝説もあるが、結果は大歓迎を受けた。前宮の祭神変更が示すように、この守屋神の聖地に建御名方命とその妻八坂刀売命をむかえ入れた。彼らへの饗応の場が境内に残っている。写真の能舞台のようなものが「神原郷」と称されて、饗応の舞台だ。建御名方命の妻八坂刀売命とその子孫は大祝（おおほうり）という神人なり、地元民から毎年鹿75頭の貢物を捧げられたという。



諏訪湖東北にある諏訪大社下社はそのさらに東北にある御射山（ミサヤマ）が御神体だ。ミシャグチ神とも呼ばれている。アイヌ語のマクイーシリ（太古の）からなまったのかもしれない。今は建御名方命の妻八坂刀売命を祭っていることになっている。

2-3-2 諏訪の名前は

さてこの地に落ち着いた建御名方命の集団はまず諏訪湖湖畔に耕稼地を開き穀類の栽培を指導した。先に示した湖畔にわずかに残る弥生時代の遺跡だ。縄文人たちはおぼろげと800m下の湖畔に降り立った。ここはアイヌ語で言うサハ（平野）だ。弥生文化の特別な意味を込めて湖畔をサハと呼び、やがてサワ（沢）からスワ（諏訪）と呼ぶようになっていったのではないだろうか。

諏訪の名前を得た出雲族即ち建御名方命の集団は、この地の成功を元に、次々と南下していった。勢力範囲を広げないと生きていけなかったのだ。農耕を初めて、収穫にいたるには何年もかかる。その間は狩猟採取の縄文部落からの貢物で生きていかなければならない。その生産力は低いので、ひろく多くの縄文部落を支配下に収めなければならなかった。各地に見る

諏訪神社はその浸透の地域を示すものであろう。

富士山麓の富士吉田市にある浅間神社は富士信仰のメッカ。江戸時代に江戸八百八丁に組織された富士講はこの浅間神社に参ることから始まる。縄文時代神奈川では近くの大山や丹沢の蛭ヶ岳を指し示す山信仰があったが、富士山は度々の噴火で恐れられたがそれを信仰する



ことはなかったようだ。この富士吉田浅間神社も元社は諏訪神社だった。諏訪一族は富士川を南下してついに富士山麓に達したのだった。今も諏訪社は元社として大切にされ富士登山を終了する秋祭りの大祭には富士の形をした神輿が境内のこの二つのやしろを往復する。

2-3-3 諏訪大社の御柱祭

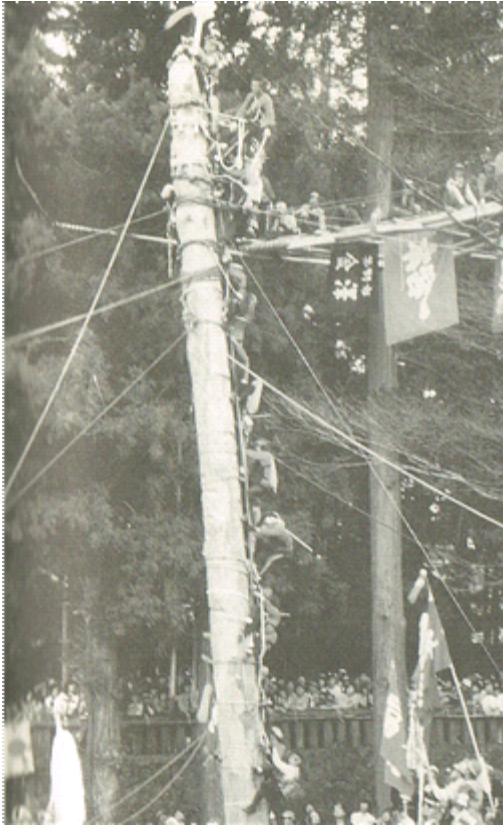


切りとった4本の巨木を立てて聖地を囲むのは縄文由来の祭りに違いない。三内丸山の6本柱、チカモリ遺跡 真脇遺跡の列柱は太陽の祭りに関係付けられたが、諏訪の4本の巨木は聖地を聖別した。

柱の巨木はここでは杉だ。栗の木のように長持ちはしない。7年毎に立て替えになる。祭りにするには良いタイミングかもしれない。八ヶ岳の西山麓は縄文遺跡の宝庫だが、ここで御柱の原木が取り出されるまでには多くの準備の神事がある。そしてこれを縄文の各村を通過して、諏訪大社まで運ぶのが御柱祭だ。途中の山

おろしの勇壮なところだけが有名だが、この全行程で全部落総出で担ぎ送るのが、縄文から現代まで続くお祭りなのだ。

最後にこの高さ16mもの巨大な宮柱を綱で引き立てて終わる。



縄文人たちは、自然に出雲族の指導に服しながら、狩猟採取の山麓生活から平野でも農耕生活に移行していった。その過程で諏訪地方の神事もその支配体制に準じていった。最高権威である大祝（おおほうり）という生神は建御名方命の子孫を名乗る諏訪氏が任じ、縄文信仰の神官守矢氏はその配下に置かれた。生神様がいるのは、明治時代までは良かったが、天皇御一人が現人神でおられる明治政策ではゆるされなかった。誇り高い先住の出雲族としては、大祝（おおほうり）の地位家系をそのまま継続したかったが、抵抗むなしく明治の宗教政策に屈し廃止された。縄文人の子孫は、多分神社の上層部のことはどうしてもよかったので

はないか、この御柱祭の祭りの熱狂さえ残れば。

2-5 縄文人の弥生化とともに旅する神様

縄文人が出雲族を受け入れ、弥生時代への幕開けが始まった。その移行期の出来事を縄文神社の弥生化を観察することで、推察できた。

農耕を始めた縄文人たちは、山ふところを離れ、川に沿って平地に降りた。

縄文神社も行動を共にしたのだ。その2つの例を見ていきたい。

神奈川県の代表的縄文遺跡は相模原の勝坂縄文遺跡である。最初の発掘調査は昭和のはじめ、大山巖元帥の長男大山柏（考古学者）によって行われ世界に発表された。その後の考古学調査で土器様式の年代別標準の基準の一つになった勝坂様式はこの発掘によっている。その貴重なものは戦災で焼け残っていない。

2012年12月に神奈川県立博物館で勝坂縄文遺跡展が行われた。土偶の展示が多く、岡本太郎が感動して世界に紹介した縄文人形と岡本太郎の太陽の塔の原型が並べてあった。



芸術に関係することのほか、大山時代の発掘で打製石斧の発見から原初農耕説が唱えられたが、祭りや宗教に関する研究はない。

この勝山遺跡に絡んで二つの聖地がある。そのひとつがすでに述べた大地の崖から湧き出す泉に置かれた有鹿神社と、東のがわに遺跡台地に接して小さい山があり、そこにおそらく山を神体とした石楯尾神社がある。忘れられたような小さな神社だ。この二つの神社は縄文人部落の移動とともに旅する神様なのだ。



有鹿（アリガ）は古代語の水を意味するという説があり、勝坂遺跡にある泉が湧く洞窟が有鹿神社の縄文時代の原型である。それがその後の縄文人たちの農耕民化によって、川辺に降り、三回にわたってくだっていった。泉の源流が鳩川と

なるところに中宮がある。現在の本宮は海老名市上郷にあって鳩川が相模川に合流するところにあつて、海老名第一の神社だ。今も相模最古の神社とされている。水引祭り（遷座祭）は本宮から奥宮まで6 Km を神輿が旅をする。



鵜沼皇大神宮
の石楯尾神社

石楯尾神社もまた旅する神社だ。元社は相模湖の源流桂川近くの甲斐の国と相模の国の境にあつて、巨石が神体の縄文神社だ。縄文人の移動とともに相模の国上野原に行き、先の勝原遺跡のそばに移り、最後は相模湾の近くの鵜沼まで下がってきた。ここま

でくれば弥生時代以降だろう。鵜沼の石楯尾神社は、後世に地元武士が伊勢皇太宮を招請したので、今は鵜沼皇大神宮となっている。しかし石楯尾神社は写真のように、この敷地の元社としての待遇はうけている。富士宮浅間神社の元社諏訪神社も同じく残って大切にされていた。神社には平和共存の精神がある。

3、結び

神社が移動していったということは、弥生文化に飲み込まれていった縄文人たちが農耕民化して、平野に降りて行った時に自分たちの祭り神も一緒にもっていったことを示しているのだろう。この連続性が示していることは、縄文人は決して征服されて消されたわけではなく、彼らが見事に弥生人となっていったことを示している。むしろ弥生社会の担い手たちはかつての縄文人たちなのである。

初めに縄文人に接したのが出雲族であったことは、幸運であった。神話にも語られているように出雲族は国作りに熱心で、鉄の生産や農耕の技術を社会に植え付けるリーダーシップにとんでいた。重要なことは戦いを好まなかったことだ。平和で友好の雰囲気の中で接してくれたので、縄文人たちは、出雲族をリーダーと

して奉り、気持ちよく指導者としての役割を果たさせた。これは縄文人の見事なフォロワーシップといえよう。模範的なリーダーシップとフォロワーシップの関係が、初めの縄文から弥生の移行期にあったのだ。

諏訪族は出雲の支流だが、本体の出雲族も北陸や日本海に面した出雲王国から南下した。京都を通り、鴨（加茂）一族を置き、大和に至って卑弥呼王朝を築いたのも彼らであった。大和の三輪山の神体は出雲の神だ。

ハッピーな移行期は、別の弥生族が九州に上陸したことで終わり、戦乱の時期を迎えた。そして記紀に書かれたように、天孫族の勝利で終わったこの国の歴史時代が始まる。その後も支配者間の争いがこの国の歴史となってしまった。

しかし縄文人はフォロワーシップを大切に、歴史の底流をしぶとくたく生き抜いた。幸か不幸か日本人の気質にはそれが色濃くのっている。今も日本人は米国をリーダとし、良いフォロワーの役割を果たしていかなければ落ち着かない。サイレントマジョリティとも言われる大勢も、そのような縄文人氣質かもしれない。政治や経済は、リーダーシップをもちたがる弥生人氣質にまかせればいい。しかしどっこい、こちらは全く別次元の分野の芸術や祭りの世界で、大いに生きる力を発揮させてもらう、それこそが人間の本分だと考えるのが縄文人氣質だ。



日本人は、かくして縄文人であり、同時に弥生人でもある。日常は弥生人として冷徹に生き、いざ祭りになれば、生きがいここにすべて賭けるような情熱的縄文人にもどるのである。祭りには何年もかけてできるだけ大掛かりの仕掛けを準備し、当日近くになれば練習に日時を費やし、そして爆発させるのである。そこには縄文人の顔が蘇っているのだ。東北のねぶた祭り神田の三社祭、私の地元の茅ヶ崎浜降祭など、全国どこにでも見られる風景だ。

元来山とか巨岩とか泉を聖地とし、鳥居や柱で印をしたのが、縄文に由来する日本の神社の原型であったのが、弥生時代に、この聖地に指導者・支配者をたてまつり、祭神としたとき、オヤシロをもつ日本の神社は完成した。どこの神社も神話に出てくる神のどれかを祭神としつつも、参拝する人たちは、祭神が誰かにはあまり頓着せず、「何事のおわしますかは知らねども、ありがたさに涙こぼる」という日本特有の神社信仰が生まれたのだ。たてまつっておいて、そして忘れる。見事な棚上げ思想だった。

村の鎮守の八幡様が応神天皇の化身とは誰も気にしない。八幡様の元締め宇佐八幡は元来が山と巨石の縄文神社であった。奈良時代大仏様の開眼式が国家行事として行われるのに危機感を覚えた宇佐の神官たちは勢力回復にある戦術を編み出した。天皇家の祖先の大王である応神天皇が宇佐に現れたと話をこしらえて、奈良に乗り込んだ。大仏の上に行く守護の役を買って出たというわけだ。宇佐八幡宮は、今もそのような神話を乗り越えてその自然の素晴らしい舞台に人々は集う。

村の鎮守の八幡様も、むらの森という自然を守っている。